

WEP

ウェブ俳句通信

VOL. 81

俳句通信

特別作品25句 ● 加藤耕子「五月六月」

新連載 ● 川崎展宏の文業
「酔語」(「虚子から虚子へ」) 須原和男連載 ● 金子兜太の彼方へ
「戦後俳句の視点」(下) 筑紫磐井追悼 ● 小宅容義氏
「小宅容義先生を偲びて」吉岡桂六
小宅容義80句 編集部選【特別作品50句】
青山 丈「夏越まで」【特別寄稿30句】
ながさく清江「青のとき」
浅井民子「沙翁の戯曲」【実力作家競詠20句】
宇都宮敦子「牛蛙」
前澤宏光「入梅」

● 好評エッセイ ●

先人に学ぶ俳句

「飯田蛇笏(一)」——句集「山嵐集」(一) 岸本尚毅
俳句とともに「飯田龍太の風景」

——一月の川 井上康明

虚子の肖像「伝統俳句」坊城俊樹

虚子散文の世界へ「小説」への道のり 本井 英
時空の座・拾遺「寒がる端無公」西池冬扇

森澄雄の書な「結婚」千田佳代

文学エッセイ——放浪のかたち

「『おんおん』と降る雪」酒井佐忠

地味で空な虚子句 五句集を読む

「『ホトトギス』五百号前後」飯西敦子

● 作品 ●

松本 旭・大高森海・友岡子郷・坪内稔典・
西村和子・山田佳乃・豊田都峰・後藤昌治・
藤村克明・関森勝夫・いのうえかつこ・
山崎十生・大島未知男・廣瀬町子・小川斗夢・
椎名 彰・森多得三郎・畑中とほる・佐藤喜孝・
柴田多鶴子・南 一晃・横井 遠・名取里美・
横井理恵 はか

追悼 小宅容義氏



2009年11月 浅草

小宅容義氏が、5月17日、多臓器不全で亡くなりました。87歳。亡くなる最後の日まで俳句について考え、俳句を詠む作家でした。小宅氏が生前、上梓の準備をしていた第6句集「尺寸」は、近く弊社から刊行の予定です。

写真・長谷川新三

A photograph of a woman with long dark hair, wearing a black and white striped short-sleeved shirt, sitting at a dark wooden desk. She is looking slightly to her left with a gentle expression. Her hands are clasped together on the desk. In front of her is an open book and a glass of amber-colored liquid. The background features a wooden bookshelf filled with books on the left, and a wooden cabinet with glass doors containing various dishes and teacups on the right. A small decorative figurine sits on top of the cabinet. The overall atmosphere is quiet and scholarly.

書齋にて

中田尚子

特別作品25句

五月六月

加藤耕子

時彦忌 二句

薔薇黄なり草間時彦なき月日

花檣胸の奥まで雨けぶり

右へ左へ草叢めぐる夏の蝶

深く強く夏草の根の土つかむ

常寂光寺 四句 カークアップ忌

青葉闇走り根太く立ち上り

一山を領すばかりに椎匂ふ



川崎展宏の文業

須原和男

新連載—①

川崎展宏氏は二流の俳人であり、また一流の文章家でもありました。

その俳句については多くの人がよく鑑賞し、よく書いてきていますが、展宏氏はその散文で何を書き遺したかなどについて、その跡をたどる試みに展宏門の須原氏にこの連載で挑んでいただきました。





前列右から 今富氏、中山氏、遠山氏
後列右から 星野氏、小坪氏、藤本氏

ゲスト 今富節子・小坪健水
遠山陽子・中山世一

ホスト 星野高士・藤本美和子

編集長 超結社句会の第24回目です。ゲストは「紹」同人の今富節子さん、「花鳥米」「屋根」同人、「青林橋」主宰の小坪健水さん、「弦」主宰の遠山陽子さん、「百鳥」「晨」同人の中山世一さん。ホストは「玉藻」主宰の星野高士さん、「泉」主宰の藤本美和子さん。遠慮のない意見交換をお願いします。

高士 点が割れました。良い句があったので、ばらついたんだと思います。3点句が多かったですね。では、まいりましょう。

古戦場流るる川や鮎雑炊

健美 富

健水 「古戦場」というところで、ある広さを感じます。そういうところを流れている川。景としてもはつきりしていますし、「鮎雑炊」を食べながら昔のことなども思い出しているんじゃないかな、ということも感じられて良かったと思います。

美和子 どちらかというと、関西の趣があるかなあと。姉川なんかを思いました。歴史的な史実の重みみたいなものが、何も言っていないところに感じとれるところがこの句の奥深